

中国・石門坎の観光資源化プロセス 政府と諸 アクターの相互作用に着目して

著者	汪 牧耘
著者別名	WANG Muyun
雑誌名	白山人類学
巻	22
ページ	131-151
発行年	2019-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010403/

中国・^{せきもんかん}石門坎の観光資源化プロセス
——政府と諸アクターの相互作用に着目して——

汪 牧耘*

Turning a Politically Sensitive Place into Tourism Resources:
Interaction between the Government and Various Actors in Shimenkan,
China

WANG Muyun*

Abstract

The purpose of this paper is to highlight the process of utilizing tourism resources through the analysis of various actors' activities and their influence in Shimenkan (Guizhou, China), a city undergoing a so-called "government-led" tourism project. Shimenkan is famous for the history of the Miao ethnic group's great educational achievement since the arrival of Christian Missionaries at the beginning of the 20th century. In 2016, as part of the Guizhou Provincial People's Government's policy (Shimenkan) because of its poverty, it became a target area for tourism development as a means of economic stimuli for the local people. However, Shimenkan is also known as a place that is generally avoided by the government due to Christianity's influence in this area. This paper explains that how actors' activities influence Shimenkan's tourism and government-led tourism development. This paper will examine the history of Shimenkan in the 20th century and analyze the interplay of actors such as the local people, intellectuals, activists, and government officials as they reevaluated Shimenkan's history, especially through the events that occurred after the Reform and Opening up of China.

The literature on contemporary tourism development in China has focused on the strong-armed tactics and negative influences of government-led projects, such as the government ignoring the local community's autonomy, benefits, and identity. However, in analyzing Shimenkan, it is clear that the government's decisions are influenced by the pressure of local actors, particularly towards accepting

* 東京大学新領域創成科学研究科 ; Graduate School of Frontier Sciences, The University of Tokyo, 5-1-5, Kashiwanoha, Kashiwa-shi, Chiba, 227-8561/oumakiunn@gmail.com

Shimenkan's historical and cultural values which were denied before. Moreover, one can better understand the government's approach and thought process by analyzing how it organized and its reaction on other actors.

キーワード：石門坎，観光資源化，アクター，政府主導

Keywords: Shimenkan, tourism development, actor, government-led

はじめに

本稿は、中国貴州省の石門坎を取り上げ、政治的イシューをはらむその地の文化や歴史はどのように政府主導の観光開発の対象になったのかを、改革開放から約40年間における諸アクターの相互作用からひもとくものである。

石門坎は、貴州省威寧県石門郷に位置しており、20世紀前半の社会的な変容で注目が集まった場所である。1904年に、イギリス人のキリスト教宣教師が石門坎を訪れ、漢族の教師や地元住民の協力を得て布教活動と学校教育を行った。当時の石門坎における精霊信仰者だったミャオ族1,000人以上がキリスト教に入信し、積極的に教育を受けた。宣教師や地元住民らが設立した小・中学校の卒業生から教師や地方行政官になった人が多くいたため、石門坎は「西南中国における文化水準の最も高い地域」として有名になった〔王 1983: 249〕。それから1世紀余りが経過した2016年、貴州省政府による貧困撲滅政策¹⁾を契機に、石門郷において多くのインフラ整備や産業振興プログラムが本格的に行われ、観光開発もその政策の一環として進められている。20世紀前半のキリスト教と教育成果で有名になった石門坎は、今日では観光開発の対象地になっている〔史・施・許・許 2016〕。

他方、石門坎は1950年代後半から70年代にかけて中国全土で展開した政治運動で、教会や学校が壊され、キリスト教徒や知識人が弾圧された歴史を抱えている地域でもある。今は観光開発の対象になっているものの、そこにおける民間人の調査・取材や、キリスト教に関する活動は80年代の改革開放以降も政府にしばしば制限されていたのである²⁾。

改革開放以降の中国においては、石門坎のように政治的イシューをはらむ地域を含め、あ

1) 2016年9月、貴州省政府は貧困人口数や都心への距離などの指標をもとに、省内の20の郷・鎮を極度な貧困地域と指定した。個別の調査データは公表されていないが、石門郷はそのなかの1つである〔貴州省人民政府（オンライン）2017〕。

2) 外来宗教であるキリスト教が中国政府に警戒されることが多くある。警戒の理由として、政権政党の共産党は無神論の政党であることや、中国国内の政治状況や国家の安定への影響などが取り上げられる〔謝 2010; 片岡 2016〕。今でも中国で政府から厳しい対応を受けているキリスト教会が多くある（例えば、温州の教会強制撤去）。また、本稿における政府という表現は、具体的な行政区レベルが特定できない場合に使う。それ以外は、中央・省・県・郷政府と明記する。

る地域の歴史や文化を観光のために活用し、経済的な利益をもたらそうとする政府主導の開発計画は少なくない。先行研究では、こうした政府主導の開発の結果を批判的に捉える研究が多い³⁾。それに対して本稿は、一見政府主導に見える観光開発が形成されていく過程に着目し、石門坎の文化や歴史の資源化のプロセスを分析する。

経済学者のジンマーマンは、資源は「あるもの」ではなく、人々の働きかけによって「なるもの」と説明しており、その変化がなぜ、どのように起きたかのプロセスを解明する必要性を指摘した [Zimmermann 1983]。文化や歴史の資源化としてよく取り上げられるのは観光開発だが、それだけとは限らない。既存の「あるもの」に対する再解釈や捉え方の変化それ自体も、資源化の働きかけといえる [木下 2002]。例えば、実際の経済的利益が生まれなくても、かつてはあまり注目されなかったある集団の日常的な生活様式を独特な文化として見直すことも、一種の資源化と考えられる。また、ある文化の資源化を研究するには、資源化の行為者は必ずしもその資源の所有者とは限らないため、それに関わる諸アクターとその目的の関係性に注目する必要がある。すなわち、「①誰が、②誰の『文化』を、③誰の『文化』として（あるいは誰の『文化』へと）、④誰をめぐって『資源化』するのか」 [森山 2007: 85] と問いかけることである。

以上のことから、本稿では、具体的にどのようなアクターがどのように石門坎の歴史や文化に働きかけ、それによっていかなる変化が生じたかという資源化プロセスを明らかにすることを目的とする。それを踏まえて、「政府主導」だけでは説明できない観光開発における政府の受動的もしくは反作用としての動きを考察する。

本稿の構成は次の通りである。I章では、中国における文化や歴史の観光資源化についての先行研究を検討した上、石門坎の事例を位置付ける。II章では、石門坎のフィールドワークの概要とその歴史的背景を説明する。III章では、3回のフィールドワークの結果をもとに、改革開放以降、石門郷が外部からアクセスできるようになってから、そこにおける人々の動きとそれによる変化を約40年間にわたってひもとく。また、進行中の観光開発をめぐってどのような議論があり、現在どう実施されているのかを述べる。IV章では、政府主導を前提にしたのでは説明できない、行政側の行動に影響を与える要素について考察する。最後に、様々なアクターの相互作用が石門坎の観光資源化にどのような影響をもたらしたかについての結論を述べる。

I 中国における文化の観光資源化

中国において、ある地域の観光資源を活かす動きは、政府が観光業を国民経済発展計画に正

3) 詳しくはI章を参照。

式に組み入れた1980年代に始まったと考えられる〔馬 2003〕。観光業の発展とともに、観光資源は自然景観に限らず、ある地域の史跡、神話や伝承などといった独特な歴史や文化も経済成長に結びつく資源とみられるようになり、開発の対象となっている。2018年、中国の国務院は別々だった文化部と国家観光局を組織統合し「文化・観光部」（中国語：文化和旅游部）を創設したことから、政策的には観光と文化の関係性の深化が想定される。

中国における文化や歴史の観光資源化に対して、政府の動きは大きな影響を与えている〔瀬川編 2003〕。住民意思の尊重を原則として立ち上げた開発計画であっても、現実的には政府の指示にしたがって行われ、地元住民は従属的な立場に置かれる〔曾 2001〕。こうした政府主導に対して、2つの側面からの批判がなされている。第1に、観光の受益者が住民でないことである。政府の開発は市場原理がもたらす経済格差を解消するためにあるにもかかわらず、地方政府や国有企業が観光開発を独占し、利益を得ようとするケースが多く見られる〔韓 2008〕。第2に、ローカルな文化を変容させることである。政府主導の観光開発において、地域の歴史や文化が政府の価値判断によって取捨選択される〔瀬川 1999〕。例えば、ある地域の文化に宗教的な要素が存在する場合に、政府が文化の再解釈や「脱宗教化」を要求する傾向が指摘された〔片岡 2016〕。

もちろん、中国における文化の観光資源化の研究は全てが政府主体で論じられているわけではない。そもそも、政府の開発がなくても、マスメディアの発達や人の移動が頻繁になっているなか、地域社会の歴史の再解釈や伝統的な文化の変容が不可避だという指摘がある〔雨森 2008; 権 2012〕。また、政府と地元住民のほかにも、観光客、知識人、観光業者など多様なアクターの存在に着目した研究もある〔孫 2016〕。しかし、行政側の支配的な力は依然として中国を研究する際に避けられないテーマであり、議論の前提と指摘される〔塚田編 2016〕。

本稿で取り上げる石門坎の観光開発も政府主導で行われており、住民の意見に注意を払わず行われている恐れがあることは先行研究の指摘の通りである。しかし、本稿で石門坎の事例を取り上げる理由は政府主導の結果生じる「弊害」への解決策を示すことではなく、その政府主導に至るまでのプロセスの解明にある。

本稿では、進行中の観光開発に至るプロセスにおいて、石門坎の歴史や文化に対する諸アクターの働きかけとそれによる地域の変化を明らかにすることを目的とする。石門坎の訪問者を警戒してきたにもかかわらず、今はその地を観光開発しているという一見二律背反する行政側の対応が生じたプロセスを描くことで、「支配的な力を持つ」中国政府の行動に何が影響を与えているかを分析する。また、石門坎については、多くの研究者や在野の知識人がこの地の過去に惹かれたため、すでに一定程度の地域研究がある一方、近年の観光開発に関する研究はほとんどない⁴⁾。

4) CNKI(中国学術情報データベース)で検索すると、「貴州 石門坎」をテーマにする論文は118本ある。

II 調査地の貴州省・石門坎

1 調査概要

本稿で取り上げる石門坎は、中国西南部の貴州省の石門郷に位置する。石門郷は、威寧県の北部に位置し、雲南省と隣接する。貴州省の省都である貴陽市から487キロメートルほど離れている。石門郷内は鉱物資源の埋蔵量が豊富である一方、土壌の質が悪くて農業に不向きである〔石門郷党政綜合辦公室 2016〕。

筆者は、①2016年8月8日から8月24日までと、②2017年2月12日から3月9日まで、③2018年8月24日から26日までの3回にわたってフィールドワークを実施し、民間および省・県・郷政府のインタビュー協力者計30人以上に聞き取り調査を行った⁵⁾。調査の中心地は石門坎である。

石門坎の地理的な外縁は曖昧であり、文献における定義も様々である。狭義の石門坎は、20世紀初めに宣教師らによって作られた校舎や教会などがある榮和村の一部を指す。それに対して、広義の石門坎は西南三省（雲南省・四川省・貴州省）で展開してきた教会学校の所在地を網羅する〔沈 2012: 110〕。本稿では、狭義の石門坎を調査範囲としたため、石門坎を「石門郷榮和村の『光華小学校遺跡群』とその周辺の自然集落」と設定する⁶⁾。

2 歴史的背景

清朝末期の中国は欧米列強に侵略され領土と主権が奪われつつあった。天津条約（1858）と北京条約（1860）の締結によって、キリスト教の信仰と布教の自由が保証されてから、宣教師がさらに中国の奥地へ積極的に入ってきた〔曾 1988: 39〕。1905年に石門坎を訪れたイギリス人宣教師のサムエル・ポラード（Samual Pollard 1864-1915）は、循道公会⁷⁾に属し、当時イギリスから中国へ布教の流れにしたがってきた1人である。

ポラードは山岳地域の石門坎で、キリスト教の信仰を定着させられると思わなかったが、予想以上に成功した〔Pollard and Dymond 1919〕。当時、イ族に支配されていたミャオ族⁸⁾はポラードに庇護を求め、イ族の支配から脱しようとした〔曾 1988: 47〕。したがって、ポラー

そのうち観光関係の論文は1件しかなく〔田 2010〕、石門坎の観光開発への政策提言が書かれているだけで具体的な論述がほとんどない。（最終検索日 2019年1月6日）

5) 本稿におけるインタビューの内容は基本的に匿名または仮名での引用である。

6) 現在の榮和村の榮和組と石門組を中心とするエリアである。「組」とは、「村」における「村民自治組」を意味する。榮和村には5つの組がある。榮和村の面積は7,160平方メートルで、674世帯が住んでいる。少数民族は総人口の半分近くを占めており、その多くはミャオ族である。

7) プロテスタントの六大教派の1つであるメソジストを指す。18世紀、イギリスのWesley兄弟によって設立された。

8) ミャオ族は主に中国の雲南省や貴州省の山岳地域で暮らしている少数民族である。風習や言語によって多数の支系に分けられており、石門坎のミャオ族は「大花ミャオ（A-Hmao）」と呼ばれる支系に属している。

ドの布教活動は地元のミャオ族の協力を得て行われ、多くのミャオ族がキリスト教に入信した。教会とともに学校が建てられ、聖書のほか、国語や算数などもそこで教えられている。

1915年、ポラードが腸チフスで亡くなったものの、地元のミャオ族や漢族、それにポラードの西洋人の同僚が石門坎の教会を運営し続けた。1920年には、石門坎教会の分会が増えるとともに、宣教師や地元住民が設立した「石門坎光華小学校」や「石門坎民族中学校」の分校だった教会小学校は34ヶ所に拡大し、多くの人材を世に輩出している⁹⁾。その影響は周辺の少数民族地域にも及んだため、石門坎は20世紀の西南中国における循道公会の布教とミャオ族の教育の発祥の地として知られるようになってきた [朱 2015: 194]。こうしたキリスト教の影響と教育の成果は、「石門坎現象」と後の研究者に呼ばれている [沈 2007]。



写真1 1928年の石門坎の遠景

出典：楊志武氏の資料より

輝かしい「石門坎現象」は、1930年代頃から、当時の中華民国の国民党政府に注目されるようになった。視察にきた国民党幹部は、石門坎のキリスト教の強い影響力を警戒すべきものとみなした [马 2016: 124]。それ以降、石門坎は国民統合と国家の安全保障に深く関わる場所として捉えられるようになり、国民党政府は石門坎のミャオ族に中華民国の国民として振る舞うことを強要し、石門坎で党员を集めるための宣伝を行った [沈 2007: 256-257]。

1940年前後、自然災害や国内外の戦乱によって、石門坎周辺の山岳地域で山賊が出没したことで、教会や学校は略奪され、外国人の宣教師は身を守るために帰国し始めた [沈 2007]。残った宣教師の一部は国民党に肩入れし、教会は国民党の政策宣伝・党员募集の場となった。このように、中華民国期の石門坎では教育成果を挙げる一方で、キリスト教の信仰と学校教

9) 1940年代の調査によると、ミャオ族の石門坎光華小学校の卒業生は数千人、中学校の卒業生は数百人にのぼった。専門学校や大学に進学した人は30人に達し、博士号の学位を取得した者も2人いた [东 2004:138]。

育に対する懸念が現れ始めていた。

中華人民共和国の建国直後、国家の安定と団結をめざす民族・宗教政策によって省政府による石門坎への支援が行われた。しかし、1950年代後半以降、政治路線をめぐる対立から展開された階級闘争によって、中国全土が社会的な動乱に巻き込まれた。文化大革命（以下、文革と表記）をはじめとする社会運動にともなう反帝国主義の風潮にしたがい、西洋と関わるもの全てが攻撃的になった。

石門坎では、宣教師や地元住民らが建てた教会や校舎、宣教師の墓が相次いで壊され、ほとんどの教会の活動が中止された。学校の卒業生やキリスト教徒も批判の対象となり、投獄されたり、逃亡や自殺などに追い込まれたりすることが多くあった〔馬 2016〕。石門坎の研究では、文革による被害を政策の誤りという側面から取り上げているものがあるが（例えば、〔沈 2007〕）、文革が始まった段階では、それを「偉大な指導者の毛沢東による先進的な革命思想」として捉えた地元住民が少なくなかった¹⁰⁾。

1976年、毛沢東の死によって文革が終焉に向かった。改革開放後、貴州省の全省民族会議が開かれ、少数民族地域の経済・文化の発展の方針が省から県や郷へ伝達され、威寧県の地方政府も文化の復興と信仰の自由の政策を取り始めた。しかし、地元のミャオ族へのインタビューによると、当時の彼らはミャオ語教育に積極的に取り組んだ一方、宗教を「厄介なもの」として距離を置いた。

文革のなかで冤罪になった人々の名誉回復を中央政府は改革開放以降に行い始めたが、30年以上にもわたった社会的動乱による後遺症から回復するのは簡単ではなかった。1977年から1990年の13年間、石門郷のミャオ族出身の大学または専門学校の合格者は皆無である〔威寧彝族回族苗族自治县志编纂委员会編 1994, 2014〕。また、1980年の石門坎の地元住民の年平均経済収入は24.1元であり¹¹⁾、深刻な貧困状況はその後も長い間続いてきた〔馬 2016: 292〕。

以上のように、1世紀前には「信仰と教育の発祥の地」だった石門坎は、改革開放初期には様々な問題を抱える地域となった。それではなぜ今になって、石門坎はふたたび歴史的・文化的価値のある場所として観光開発の対象になったのか。

III 今に至る40年間におけるアクターのせめぎあい

省政府によって石門坎の観光開発が本格的に行われるようになったのは2016年だが、改革開放からの約40年間、石門坎には知識人、キリスト教徒や民間団体など多様なアクターが関わってきた。本章では、石門坎に次々と登場してきたこれらのアクターはどのようにそ

10) 石門坎の年配者、楊木へのインタビューより、2016年8月20日。

11) 同時期の貴州省農民の年平均経済収入は161.46元だった。

の地の文化や歴史の資源化に影響を与えてきたかを中心に分析した上で、2016年からはじまった省政府主導の観光開発の経緯を述べる。

1 他者評価による自信の喚起

改革開放以降、山に閉ざされた石門坎にまずやってきたのは政府の支援ではなかった。村人へのインタビューによると、1980年代初めに石門坎を訪問したのはこの地の歴史に関心を持つ大学教員¹²⁾や都市の知識人であった。地元住民のなかでは、民間の知識人や学者の発信によって、石門坎が再び世の中に知られるようになったと認識されている¹³⁾。

なかでも、改革開放後初めて石門坎を表題にした本を出版した張坦の影響が大きい。張坦は元々省政府の宗教部門の職員である。彼は石門坎におけるキリスト教の拡大と対照しながら中国の儒家思想を批判し [張 1992]、その問題提起はほかの知識人の好奇心を呼び起こした。

書物が広く読まれたことは、外部の人々が石門坎を知る機会になっただけでなく、地元のミャオ族にとって自らの過去を再評価するきっかけになった。朱玉芳はそのようなミャオ族の一人である。朱玉芳の父親は、20世紀の石門坎における有名なミャオ族知識人である¹⁴⁾。朱は父の回想録を書こうと何度も思っていた一方で、彼が肅清運動の圧力に耐えきれなくなって自殺したこと、また、自分たちが彼の子供として、文革などの社会運動によって散々批判を受けてきたことを考えると、自ら書くことはつらいと感じていた。しかし、張坦の本を読んで、朱玉芳の考えは変わった。

張坦先生が『「狭き門」前の石門坎』を出版しました。その本の中で、張坦先生は私の父親をその時代の西南中国における「ミャオ族の教育家」と高く評価してくれました。我々はそれを見てから、「書けるのだ、書こう！」と決意しました。ほかの人ですら父親のことを書いたのです。ならば、我々に書けない理由はありません。¹⁵⁾

父親の伝記を書くことを決めてから、資料を収集するために朱玉芳は夫と一緒に石門坎やその周辺の地域を訪ね、張坦をはじめとする学者との交流も頻繁に行うようになった。後述する県政府を巻き込んだ「校友会」の開催を促したのも、朱玉芳夫妻である。

12) 譚佛佑のこと。訪問後、譚は20世紀初めの石門坎教育を題材にして論文を発表した ([譚 1983] を参照)。

13) 楊木へのインタビューより、2017年3月11日。

14) 石門坎民族中学校の創始者、朱煥章のこと。

15) 朱玉芳へのインタビューより、2017年3月11日。

2 県政府による墓修復と文化財の指定

個人的な訪問はあったものの、県政府が石門坎を外部の人々に完全に開放したわけではなかった¹⁶⁾。特に外国人については状況が複雑になる。外国人の報道は中国政府の面子を傷つけることが多いため、ジャーナリストはじめとする海外からの訪問者を県政府はしばしば拒否した [馬 2016]。他方で、宣教師の子孫の場合は、異なる配慮が見られる。

1991年から、かつて石門坎で活動していた宣教師の子孫が県政府に対して、石門坎への訪問申請をし続けていた。それらの申請に対して、県政府は雨期における道路の安全問題への懸念を挙げて拒否した。また、宣教師の墓が文革の時代に破壊されたまま修復されず、砕かれた墓を彼らの子孫に見られるのは良くないという配慮もあった。

しかし、当時の石門坎は学者や知識人の著作によって広く知られるようになり、石門坎の発展に寄与した宣教師やこの地の出来事を心に刻んで忘れないようにするため、墓の修復を行うべきだという石門坎の地元住民の主張は省政府にも届くようになった [馬 2016: 338]。こうしたなかで外国人の訪問を拒否し続けると、政府ないし国への評判を悪くする恐れがあり、早めに墓を再建したほうが国際的な友好関係の構築にも有益だと認識されるようになった¹⁷⁾。1992年に、県政府は宣教師の墓の再建を行った。3年をかけてポラードの墓が再建されるとともに、その新しい墓は威寧県の文化財に指定され、宣教師の子孫の訪問も受け入れられるようになった [威寧彝族回族苗族自治县志编纂委员会編 2014]。

今日では、宣教師の墓は石門坎の歴史を代表する、また石門坎に貢献した宣教師を祀る重要な場所になった。しかし、こうした県政府による墓の修復と文化財指定は必ずしもキリスト教による布教の意義を認めたわけではなく、むしろ民間の懇願や「国際的な視線」に圧力を感じた妥協の結果だと考えられる。

3 「石門坎文化」を発信する NGO

1990年代における宣教師の墓の文化財指定は、直ちに「観光開発」という発想をもたらさなかった。石門郷へのアクセスは極めて不便で、深刻な貧困問題も抱えているからである。2000年代半ばに至っても石門郷の住民は10元（約76円）程度の日給のために、深刻な健康被害をもたらす鉱山作業の仕事を競い合っていた [沈 2007: 19]。今日の石門坎では貧困撲滅政策は政府主導で実施されているが、その頃活動しはじめていたのは OXFAM や CARE¹⁸⁾ などの国際 NGO であった。石門坎の歴史や文化に惹かれて NGO に参加し、そこから長い間石

16) 取材や調査にきた民間人は、村の政府職員に身分証明書を提示させられることが2000年以降もあった。

17) 以下は、当時の宣教師の墓の修復に参加した県政府の職員、張陽へのインタビューより、2016年8月9日。

18) OXFAM は1942年に、「オックスフォード飢餓救済委員会」として始まり、世界の貧困と不公平の問題を解決しようと活動している。CARE は1945年に、アメリカで設立された人道援助団体から発足した組織である。

門坎やミャオ族の宣伝に関わってきた李爽は、その中の一人である。

李爽は、泥沼化した貧困状態におかれているミャオ族にとって重要なのは彼らの文化やアイデンティティを他者に理解してもらうことだと考えた。そのような思いで、李爽は貴州省や雲南省のミャオ族を中心に少数民族の教会活動、伝統行事、口述史などを写真や映像で記録し続けた。それぞれの記録をデジタル化して、自ら運営する「石門坎に近寄る」というホームページ (<http://www.shimenkan.org>) で配信している。前述した張坦をはじめとし、石門坎に関する本や論文を書いた知識人は、自分の原稿のデータを無料で「石門坎に近寄る」に公開している。それを通じて石門坎の歴史や文化、また貧困状況やこれからの活動情報に、より多くの人がアクセスできるようになった。

NGO の影響力が現地で強まり、多くの地元住民に感謝されるようになると、政府の警戒や摩擦につながった。ネット上の写真の掲載によって、石門坎の貧困状況に関する情報が広まることは政府の面子に関わるという理由で、李爽が行政側に注意されたことも少なくないという。石門坎の NGO スタッフは行政側によるプレッシャーを受け止めながら、少数民族の貧困問題や文化伝承の難しさを憂慮し、道路の整備、インターネットの発信や教育支援などを続けてきた。10 年以上に及ぶ NGO スタッフの努力によって、地元住民の生活はある程度改善され、石門坎に関心を持つ訪問者も増加したといえる。

2000 年に入ってから、次第に存在感を増した民間アクターに対して郷政府は主導性を獲得しようとし、国際 NGO を石門坎から撤退させた。他方で、90 年代と異なり、その時期の政策には排除や制限ばかりでなく、石門坎の価値を肯定的に捉えるような動きも見られる。こうした政府側の態度の変化を促したのは、当時の民間人が自発的に行った諸活動だと考える。

4 行政を動かした 100 周年の諸活動

2005 年は、宣教師の主導の下で作られた石門坎の「光華小学校」と教会の創立 100 周年である。それを祝うために、石門坎の小・中学校の校長や教師などの教育関係者は 2000 年から慶祝活動の開催を県や郷政府に求めていたが、政府側に拒否された [王 2007]。

しかし、政府側の支持の有無にかかわらず、石門坎の教育に貢献した人々のために学校の創立を祝うべきだという民間人の熱意があった。前述した朱玉芳夫妻の提案で、石門坎の周辺地域に散在している「校友」（すなわち光華小学校の卒業生）や校友以外の石門坎に関心を持つ人々は、光華小学校の創立 100 周年を祝うために 2005 年 11 月に石門坎に集まり、60 人規模の「校友会」を開催した。

「校友会」の会場の提供などに熱心に協力したのは、当時の石門坎民族中学校の校長を務めていた周春である。校友会では主に集まってきた卒業生などの関係者による歴史への追憶や話し合いが行われた。周春は卒業生の石門坎への愛情に感動し、自分自身も石門坎が独特な

過去を持つ大切なところだと感じるようになったため、できるかぎり彼らに協力しようと決意した¹⁹⁾。



写真2 石門坎教会 100周年記念のために集まったミャオ族信徒 (2005年11月12日撮影)

出典：[陈・张・杜 2012: 311]

校友会の開催とともに、教会の設立 100 周年の記念活動も行われた。石門坎周辺の多くの教会から 2,000-3,000 人以上のミャオ族の信徒が集まってきた²⁰⁾(写真 2)。その影響もあってか、その後は他地域から石門坎に足を運ぶキリスト教徒が増えている。フィールドワーク中も、北京や浙江など中国の他地域からきたキリスト教徒に多く出会った。彼らは 1 世紀前のポラードをキリスト教徒の模範とし、石門坎をキリスト教徒の無我や博愛の成果を見学する場として考えている。キリスト教徒による支援活動は信徒の礼拝環境の改善が中心であり、石門坎教会の再建はその一例であった。

民間の慶祝活動の影響を受け、県政府は 2006 年に「世紀の交際」と名付けた慶祝会を開催した。県政府の幹部や石門坎とその周辺の住民などが多く来場し、盛大なイベントとなった。慶祝会は、高官のスピーチや歌など、話し合いを中心とする校友会と全く異なるものだった。同年、石門坎光華小学校の校舎が政府によって全面的に修復され、光華小学校とそのまわりの数箇所の建築物が貴州省の文化財に指定された。

また、2000 年代半ばから、行府側は石門坎の文化や歴史にいわば権威的な説明をつけることに積極的になった。具体的には県政府が刊行した記録集や教科書に、キリスト教徒や宣教師という宗教的な部分を巧みに回避しながらも、ポラードが教育を重視したことや人格の素晴らしさを中心とする解釈を盛り込んだ²¹⁾。それは、石門坎の文化・歴史を政府が無視や拒否をするなかで、主に信徒や知識人がその価値を解釈し宣伝してきたことに対する一種の主導的地位の獲

19) 周春へのインタビューより、2017 年 2 月 26 日。

20) 石門坎教会の責任者、呉国へのインタビューより、2017 年 2 月 22 日。

21) 『威宁苗族百年实录』や『威宁文史资料第五集・石門特集』など、かつてのミャオ族、県政府の幹部および研究者の出版された文章をさらに取捨選択して編纂されたものである。教科書の例として、地元の小・中学校で使われている『五心教育』が挙げられる。

得とも考える。これに対して、それまで活躍してきた民間アクターによる抵抗が見られる。例えば、地元住民のなかには、政府の修復によって、遺跡のもともとの姿をなくし、宣教師の貢献の証を永遠に隠そうとしているのではないかと批判する人もいた。

5 民間の「協力関係」と新たな繋がり

政府と民間のせめぎあい表に出るようになった石門坎を訪れる民間活動家が、2010年以降に著しく増えている。それを促したのは、前述した李爽の発信のほか、2010年頃に設立された「石門坎教育公益財団法人」による強力な宣伝だと考えられる。財団の中心人物の武浩は石門坎が「キリスト教信仰による社会変革のモデル」だと主張している。現在は大学の研究員という肩書で活動する機会が多いが、彼は1980年代の中国金融業界の著名人でもあり、人脈と資金力を生かして「信仰の聖地」である石門坎の再興のために多くの活動を行っている。それらの活動は地元への経済的な効果があまり見られなかった上、武浩は石門坎で地域振興の活動を行っていたNGOのスタッフとの連携にも消極的であった。NGOスタッフはそれに対して不満を感じていたが、武浩を表立って批判しなかった。その理由は、民間の活動に協力的でなかったり否定的だったりする政府と対等に向き合うには、手段やアプローチを問わず、石門坎に関心を持つ民間人がつながったほうが望ましいと考えたからだ²²⁾。互いの意見が違っても、民間アクター間の関係を維持し、「協力」の可能性を保つ必要があった。

こうした様々な動きに対して、地元住民は無反応だったわけではない。「石門坎教育公益財団法人」が石門坎の歴史をキリスト教中心に解釈したことについて、強く批判した現地のミャオ族がいる一方で、訪問者によるそれぞれの文化・歴史への解釈を柔軟に受け止めている住民も多い。校友会で活躍し、その後も多くの訪問者を接待してきた周春の話から、その理由が窺える²³⁾。周春は、石門坎の文化の真正性やそれに対する「正しい解釈」にこだわるというよりは、どうしたら地域の発展に有益かを考えたほうが有意義だと判断する。多様な捉え方があるというのは、異なる背景の人であっても、いずれかの解釈を通して石門坎の価値を理解できるともいえる。人々が自分なりに石門坎を解釈し、さらに自らの解釈で石門坎の価値をほかの人と共有していくとすれば、それは石門坎にとっての「無料の広告」であり、石門坎の再興や人々の生活改善につながる。したがって、時にはかなり違和感を覚える主張が来訪者の口から出ても、周春はそれを否定しなかった。

民間の様々な立場から認め合う姿勢は、石門坎を開いた宣教師ポラードの子孫の石門坎訪問に一つの結実として表れた。2016年8月、学者、活動家、キリスト教徒などによって構成されたボランティアチームの案内にしたがって、ポラードの曾孫であるブレイク（Samuel

22) NGO スタッフへのインタビューより、2017年2月3日。

23) 以下は、周春へのインタビューより、2017年2月26日。

Blake) は石門坎と周辺の教会を中心に1ヶ月間訪問した。政府側が行動を把握できる範囲にブレイクたちの動きを抑えることや外国人の身の安全を守るため、郷政府の職員も同行し、郷政府はボラードの子孫を歓迎するための宴会も設けた。しかしそれらの「好意」は、民間の参加者に「キリスト教の活動は政府と関係ないから」と激しく拒否された。その不愉快な経験は、次節で述べる省政府が観光開発を計画するときに、石門坎の教会を観光スポットから排除する引き金の一つともなったという²⁴⁾。

6 「ミャオ文明」に至る経緯

2015年、貴州省政府は「石門坎・歴史文化名村の保護規則(2013-2025年)」を定め、省の政策としての石門坎の「文化と歴史」に着目する観光開発の機運が高まった。2016年、省政府は貧困撲滅政策を打ち出した。この政策は、石門坎におけるインフラ整備(道路、商店街、立ち退き先や学校など)と産業振興プロジェクト(農業、牧畜業、観光業)の2つに大きく分けられており、本稿が着目する観光開発は後者である。

3回目の現地調査の時点でも産業振興の効果は未だ特定できないが、インフラ整備の成果は好意的に評価されていた。工事による街の激しい変化について「2,3日外出しないと、どっちがどっちかが分からなくなる」「街灯が整備されて、夜が明るくなった!」と盛り上がる地元住民の声が聞かれた²⁵⁾。また、開発工事が増えるにしたがって大勢の労働者が石門坎に入り、それを商機だと考えて飲食店を開いたミャオ族の住民がいた。彼らへのインタビューによると、外部からの訪問者が主に学者や信徒である石門坎では、自分がミャオ族やキリスト教徒であることが有利だと考え、経営に希望を感じているという。

筆者は初めの2度の現地調査で、2016年8月から2017年2月というわずか半年間の工事による街の急速な変化を目のあたりにした。2018年8月の3回目の現地調査では、商店街の様子には大きな変化はなかったが、観光施設や崩壊した文化遺跡の修復や復元工事による変化が著しかった(写真3)。今後は、建築物の検査や石門坎を通過する高速道路の整備を行い、2020年までには全ての工事が完了する予定だという²⁶⁾。

2017年2月、貴州省共産党委員会の陳敏爾書記は石門坎を訪問し、石門坎の観光開発の本格化を指示した。また、貧困撲滅政策の成果を「党史博物館」という形で観光エリアにおいて展示することを求めた。それに従い、Q社という上海の観光コンサルタント会社が石門坎に呼ばれ、観光開発の設計に急遽取り組むことになった。

ミャオ族の朱心は、今回の観光開発の郷政府の担当者であり、Q社の主たる交渉相手だった。彼は故郷の貧困問題に強い関心を持ち、大学卒業後すぐに石門郷の公務員試験を受けて採用

24) 石門郷政府の政府職員へのインタビューより、2017年2月16日。

25) 地元住民数人へのインタビューより、2017年2月20日。

26) 建築チームの担当者、王文へのインタビューより、2018年8月25日。



写真3 2016年8月(左)と2018年8月(右)の同じ遺跡

出典：筆者撮影

された。先祖は石門坎の有名なミャオ族知識人であり、自らもミャオ族の歴史に興味を持って地元の年配者の口述史を記録してきたため、石門坎の歴史や文化に非常に詳しい。中国政府が地域の文化を無視していると多くの研究が批判しているが、朱心は開発と文化の両立に腐心した郷政府の職員といえる。

観光による地域振興という未来への憧憬がある一方で、朱心は、20世紀前半の輝かしかった石門坎を追憶したい、もしくはミャオ族の文化を見学したい人に見せられる「本当の石門坎文化」が現在にはほとんど残っていないと考えている²⁷⁾。その理由はまず、石門坎の遺跡群は何回もの崩壊と修復を経験したため、1世紀前の景観とはかなり異なっているからである。また、キリスト教徒にとっては信仰の聖地のように見られているが、現在の石門坎教会はむしろ過剰な注目によって支援への依存や資金の使途の不透明さといった問題も生じている。

同じ懸念はQ社の職員にもあった²⁸⁾。石門坎の現状と宣伝されているイメージとの差が大きいため、石門坎の名声が高くなり来訪者が多くなるほど、石門坎は人々を失望させる「がっかり名所」になる恐れがある。こうした石門坎をどのような観光地にするのかについては、石門坎をキリスト教の聖地として打ち出すことや、歴史的な雰囲気を見失わないために現状維持することなど、様々な提案があったが、いずれもQ社の社内会議で否定された。キリスト教聖地の案が否定されたのは、宗教問題を慎重に取り扱う必要性が社内で指摘されたからである。仮に省政府の指示がなくても、後から高官の一言で計画変更を迫られることがしばしばあるため、発注者である政府側に配慮しなければならない。そのため、キリスト教を過

27) 朱が言う「本当の石門坎文化」とは、本や紀行文、映像などで、民間の知識人や学者によって構築された石門坎の輝かしい過去の姿を指す。現代の観光と「文化の真正性」に関する研究では、社会における真正性構築のメカニズムに焦点を当て、イメージが現実を逆規定する「真正化」をポジティブに捉える必要性が指摘されている [権 2012]。しかし、先行したイメージを簡単に「真正化」できない朱心が抱えるような苦しみも無視してはいけなと考える。

28) 以下は、Q社の社員、陶佳辰へのインタビューより、2017年2月22日。

度に扱わないほうが無難である、すなわち「脱宗教化」するという結論になった。

郷政府との交渉の結果、Q社による観光開発の設計として最終的に選ばれたのは「ミャオ文明」と名付けられた案である。「ミャオ文明」というのはミャオ族の伝統文化だけでなく、石門坎のミャオ族に特徴的な教育による「文明化」の歴史も含まれている。朱心は「ミャオ文明」を中心とする観光開発は、「本当の文化」がなくなった石門坎にとっては、「無の中に有を生ずる」機会であり、ミャオ族が自らの過去を再認識し、自信を持つようになる好機だと考えている。

Q社の観光設計では、「ミャオ文明」を強調するため、石門坎の「光華小学校遺跡群」を観光資源の中心とした。一方、教会や宣教師の墓は設計に含まれなかった。それに加えて、ミャオ族の飲食、歌や踊りなど少数民族の民俗・文化を体験するための広場や商店街が新たに建設されることになっていた。既述した「党史博物館」という陳敏爾書記の提言が加わり、石門坎は省政府主導の観光開発によって、貧困撲滅の成果を展示する場になる見通しであった。

しかし、2017年7月に、石門坎の開発を推してきた陳書記が重慶市の書記に栄転した。2018年8月の現地調査によると、多くの時間を費やして作成されたQ社の開発設計は省の文物保護局に拒否された。それにより、「脱宗教化」の文脈で生まれた「ミャオ文明」の設計図は実施に移されない可能性が高い。省政府主導の石門坎の観光開発がどのようなかは、陳書記の後継者の方針に委ねられている。

IV 考察

キリスト教布教の歴史を抱えた石門坎は、政治的にセンシティブな地域ではあるが、フィールドワークでは省・県・郷の政府関係者の協力を得られ、聞き取り調査を行うことができた。その結果、観光資源化における政府の影響力について、先行研究で強調されている「政府主導」を前提に考えただけでは説明できない3つの側面が浮き彫りになったと考える。

1つ目は、行政側は必ずしも独断で行動するのではなく、ほかのアクターの動きに反応しながら動いている点である。石門坎の観光開発は省政府主導で進められているように見えるが、IIIで述べた資源化プロセスから見ると、政策方針は民間の動きを制限し左右する一方、それは必ずしも一方的に影響力を行使しているとは限らない。政府の対応は、民間の活動に呼応してその地の価値の捉え方を部分的に取り入れたり、石門坎の観光資源化を推進したりしており、民間アクターとの相互作用の結果としての側面が見出せる。

2つ目は、政策の実施が、時間の流れ、政府のレベル、解釈の主体によって必ずしも一貫していない点である。政府は中央・省・県・郷といった重層的な構造のため、省政府による政策や指示が、異なる行政レベルに伝達される過程で変化する。石門坎の宗教的要素が観光

開発計画から取り除かれたのは確かだが、フィールドワークで入手した資料と情報から判断する限り、省政府の高官は石門坎の「脱宗教化」を直接指示したわけではなかった。観光開発の方向を「脱宗教化」に傾けさせたのは、政治的な配慮が暗に求められる Q 社や県・郷政府だったといえる。

3つ目は、個人レベルにおける「政府」という境界の曖昧さである。例えば朱心のような少数民族出身者で地元住民である政府職員は、必ずしも政府の代弁者ではない。職員としての責務というより、強い民族感情や地元愛が彼の内的動機となっていた。中国政府に関する議論の多くは巨大な官僚システムに着目するが、農村部の場合は、政策や制度が活かされたかどうかは、個々の地元職員の考え方や働きかけに目を向けなければ分からない。

先行研究で指摘されているように、中国政府の圧倒的な影響力によって地元の伝統や文化を歪めることがある点は批判的に捉えるべきである [陶 2010; 塚田編 2016]。他方で、政府は必ずしも絶対的な支配力を及ぼしているわけではない。石門坎の事例において、政府の受動的、もしくは民間アクターの働きかけへの反作用としての動き、政治のリーダーシップや政府の重層的な構造など、観光そのものとは直接関わりのない要素が政府主導に見える観光開発のプロセスに影響を与えている。これらの要素は、「支配的な政府」を様々なアクターが動かすことができる可能性を示しており、中国政府が主導する開発事業における民間の力を見出すには必要な視点と考える。

おわりに

本稿は、改革開放以降の約 40 年間における石門坎の資源化プロセスを取り上げ、文献調査及びフィールドワークにおける民間人や政府の人々の断片的でありながら感情の入り混じった語りによって、おおよそ主なアクターの働きかけおよびアクター間の相互作用を分析した。それを踏まえて、本章では石門坎の文化や歴史がどのように資源とみられるようになり、さらに政府主導の観光開発の対象になったのかに対して、結論を述べる。

文化や歴史の資源化は、時代や個人によって、異なる形、語り、生活様式に価値を見出したり、意義を与えたりすることで、「あるもの」を有用なものにすることだと言える。ここではすべてのアクターや資源化の対象を網羅してはいないが、本稿の冒頭で示した資源化に関わる主体の「4つの誰」[森山 2007: 85]を参照すると、20 世紀前半の石門坎の歴史に対する諸アクターによる価値の捉え方の多様性を概観できる (表 1)²⁹⁾。

こうした様々なアクターの働きかけは、石門坎に異なる影響をもたらしてきた。改革開放

29) 表 1 はすべてのアクターに当てはめるものではない。また、ミャオ族の地元住民のように、複数の捉え方を同時に持つこともある。

表1 各アクターによる石門坎の文化・歴史の資源化

誰が	何を	何として	何のために
学者・知識人	20世紀前半の石門坎の出来事	研究対象に値する材料	少数民族地域における教育・貧困問題の解決の方策を見つける
NGO		大花ミャオが社会に知られる機会	他者による少数民族の文化や慣習への理解を促す
民間活動家		山深い貧困地域における地域振興の成功例	援助のあり方と現地民による自助努力の可能性を示す
キリスト教徒		キリスト教の宣教師と信徒の宗教心による社会変容の奇跡	教育や信仰の重要性を主張する
ミャオ族		自らの特有な記憶	キリスト教の素晴らしさを確信し、信徒としての誇りを保つ
		ミャオ族の先祖の努力による栄光の歴史	自民族への誇りを確保する
地元住民		商機をもたらす地域要素	現在再び社会的・経済的弱者になった自民族の自尊心を激励する
行政側		ミャオ族の「文明史」	個人や家族の生活状況を改善する
			貧困状況を改善し、政府の優越性を宣伝する

出典：筆者作成

以降、キリスト教信仰の自由が再び認められるようになったが、政府はキリスト教の影響拡大への懸念から依然として石門坎を政治的にセンシティブな場所として警戒している。そうしたアクセスの難しさにもかかわらず、石門坎の歴史に惹かれ、信仰や教育の点で20世紀初頭と現在との違いの大きさを解消したい様々な民間アクターは、政府と対峙しながらも石門坎の宣伝や支援活動を続けている。1980年代から、知識人が書いた書籍、ミャオ族自らの語り、NGOと地元住民によって設けられた交流・発信の場、活動家やキリスト教徒の活躍などによって、政府は石門坎の歴史的・文化的価値を認めるようになった。そうしたプロセスを経た上で、政府は貧困撲滅政策をきっかけに観光開発を本格的に進めるようになった。その途上で、行政側と観光会社が交渉を積み重ねた結果として、石門坎の歴史や文化における宗教的要素を取り除き、ミャオ文明や共産党による貧困削減の成果という新たな意義を付与しようとしたのである。

先行研究に指摘されたように、確かに進行中の観光開発において、学者、在野の知識人、キリスト教徒や地元住民などといった民間アクターは一見従属的な立場に置かれているように見え、石門坎の歴史的・文化的価値の再解釈は政府主導で行われている。観光開発を政府にとって受け入れやすくするため、キリスト教の要素を切り捨てるという「脱宗教化」[片岡2016]の動きが見られたことは確かである。しかし、現実的に政府が石門坎の歴史的・文化

的価値に注目したからこそ、石門坎は観光開発の対象に選ばれたのであり、それを促したのは、キリスト教の要素を含めてこの地の価値を評価した民間の諸アクターの働きかけだった。改革開放から約40年間の長いプロセスから見ると、政府主導の観光開発とその方針の確定は様々なアクターとの相互作用によって生まれた結果だといえる。

政府主導の観光開発の「脱宗教化」によって、石門坎で民間の多様なアクターが発掘し作り上げてきた信仰を含む歴史や文化の価値がかき消されるわけではない。政府の働きかけはその時々^{時々}の指導者の指示によって変わりやすい。観光開発を進めている政府よりも、様々な努力や柔軟な対応を通して、解釈の多様性を受け入れながら、石門坎の文化や歴史の価値を掘り返し、広めていった知識人や地元住民などの民間アクターこそ、石門坎の資源化を促した主役である。

石門坎の道路や宿泊施設は政府の貧困撲滅政策によって大幅に改善されたため、今後はキリスト教徒を含む民間人の交流・往来がより頻繁になる可能性が高い。石門坎の文化や歴史の資源化は、政府と民間アクターのせめぎ合いの中でこれからも多様なかたちで行われていくに違いない。

参 考 文 献

〔英語文献〕

Pollard, Samuel and F. J. Dymond

1919 *The Story of Miao*, London: H. Hooks.

Zimmermann, Erich Walter

1983(1933) *World Resources and Industries: A Functional Appraisal of the Availability of Agricultural and Industrial Resources*, New York: Garland.

〔日本語文献〕

雨森直也

2008 「観光化における歴史の再構成と地域住民の抵抗——中華人民共和国雲南省のペー族の新華民族旅游村の事例」『立命館大学人文科学研究紀要』91: 229-238.

権赫麟

2012 「文化の真正性をめぐる観光とポピュラーカルチャーの相互作用に関する考察」『観光研究』24(1): 59-68.

片岡樹

2016 「文化の資源化と宗教——中国ラフ族の『葫蘆文化』論をめぐって」『民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から』塚田誠之（編），235-270 ページ，東京：風響社.

韓魯安

2008 「中国観光産業の課題と持続可能な観光への若干の展望」『人間社会環境研究』15: 165-187.

木下直之

2002 「創刊の辞——人が資源を口にする時」『文化資源学』1: 1-5.

森山工

2007 「文化資源使用法——植民地マダガスカルにおける『文化』の『資源化』『資源人類学』02 資源化する文化」山下晋司（編），61-91 ページ，東京：弘文堂.

瀬川昌久

1999 「中国南部におけるエスニック観光と『伝統文化』の再定義」『東北アジア研究』3: 85-111.

瀬川昌久（編）

2003 『文化のディスプレイ——東北アジア諸社会における博物館，観光，そして民族文化の再編』東京：風響社.

孫潔

2016 「棚田の文化資源化とその再資源化をめぐるポリティクス」『民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から』塚田誠之（編），323-351 ページ，東京：風響社.

曾士才

1988 「西南中国の少数民族社会におけるキリスト教の受容」『季刊中国研究』10: 37-49.

2001 「中国における民族観光の創出——貴州省の事例から」『民族学研究』66(1): 87-105.

陶冶

2010 「観光開発に見る『民族文化』の表象——中国貴州省雷山県の『苗年文化節-』をめぐって」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』69: 117-129.

塚田誠之（編）

2016 『民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から』東京：風響社.

馬建釗

2003 「中国の少数民族と民族観光業」布施ゆり（訳）『文化のディスプレイ——東北アジア諸社会における博物館，観光，そして民族文化の再編』瀬川昌久（編），119-134 ページ，東京：風響社.

[中国語文献]

陈启基，张健（图），杜应国（文）

2012『中国石门坎：百年影像纪』云南民族出版社.

东人达

2004「近代民族教育的一项创举—滇黔川边石门坎教育体系评述」『贵州民族研究』4: 133-140.

马玉华

2016『区域文化与社会变迁—威宁·石门坎·苗族—』合肥工业大学出版社.

沈红

2007『结构与主体：激荡的文化社区石门坎』社会科学文献出版社.

2012「石门坎文化对苗族社会发展的启迪」『教育文化论坛』3: 109-115.

石门乡党政综合办公室

2016「威宁彝族回族苗族自治县石门乡基本情况」.

史开云·施毅·许学义·许定华

2016「石门人梦想触摸的旅游“高度”」『毕节日报』5月5日第1版.

谭佛佑

1983「本世纪初贵州省威宁县石門坎教会苗民教育述评」『贵州民族研究』1: 171-179.

田连伟

2010「初探 20 世纪初石门坎文化与旅游开发」『法制与社会』14: 82-83.

王大卫

2007『寻找那些灵魂』香港文汇出版社.

王建明

1983「现在西南苗族最高文化区—石门坎的介绍」『民国年间苗族论文集』贵州省民族研究所
(编), 249-250, 贵阳: 贵州省民族研究所.

威宁苗族百年实录编委会 (编)

2006『威宁苗族百年实录』贵阳: 贵州民族出版社.

威宁彝族回族苗族自治县教育局 (编)

2011『五心教育 (上册)』云南人民出版社.

威宁彝族回族苗族自治县志编纂委员会 (编)

1994『威宁彝族回族苗族自治县志』贵州人民出版社.

2014『威宁彝族回族苗族自治县志』贵州人民出版社 (电子版).

谢明

2010「当代中国基督教传播方式研究」中国社会科学院研究生院博士论文.

张坦

1992『“窄门”前的石门坎—基督教文化与川滇黔边苗族社会』云南教育出版社.
朱丽晓

2015「近30年中国的石门坎研究」『中外文化与文论』1: 194-204.
朱玉芳

2007『光华之子—我的父亲朱焕章』云南民族出版社.

[ウェブサイト]

贵州省人民政府

2017「贵州: 省级干部“挂帅”决战极贫乡镇」2018年11月16日アクセス.

http://www.gzgov.gov.cn/xwdt/mtkgz/201709/t20170927_1031996.html